

令和7年度
広島平和記念式典中学生派遣事業
報告書



川越市

事業の概要

- 1 目 的 未来を担う若者を被爆地広島へ派遣し、広島平和記念式典への参列、広島平和記念資料館や原爆ドームの見学を通して、平和の尊さ大切さを学ぶことを目的とする。
- 2 日 程 令和7年8月5日（火）から7日（木） 2泊3日
- 3 派遣人数 22名
- 4 選出方法 各市立中学校から校長推薦により生徒1名を選出
- 5 対象学年 第2学年
- 6 説明会 令和7年7月25日（金）午後1時30分から
- 7 平和を考える集い 令和7年8月23日（土）午後1時から
市立博物館 視聴覚ホール
- 8 感想文 報告書として編冊し、派遣生徒及び学校へ配布。
令和8年度の原爆写真展の際に展示。

日 程

【説明会】 令和7年7月25日（金）

時 間 午後1時30分～午後3時30分
場 所 市役所7階第1・第5委員会室
内 容 市長あいさつ、自己紹介、事業説明、班別交流

【派遣1日目】 令和7年8月5日（火）

6：20 東武東上線川越駅改札口集合
6：39 川越駅出発
8：48 東京駅出発〔のぞみ63号〕
12：42 広島駅到着
14：30 平和記念公園見学（平和記念公園及び平和記念資料館等）
17：15 平和記念公園出発
17：30 ホテル着

【派遣2日目】 令和7年8月6日（水）

6：50 ホテル出発
7：10 平和記念公園到着 式典受付
8：00 平和記念式典 開会
8：50 平和記念式典 閉会
13：00 広島市役所到着
13：30 平和学習受入プログラム
17：00 ホテル到着

【派遣3日目】 令和7年8月7日（木）

9：30 ホテル出発
10：00 広島駅到着 広島駅構内にて自由行動
11：03 広島駅出発〔のぞみ96号〕
14：57 東京駅到着
16：30 川越駅到着 解散

【平和を考える集い】 令和7年8月23日（土）

時 間 午後1時～午後4時
場 所 市立博物館視聴覚ホール
内 容 意見交換会、体験発表、講演

参加者感想文



想いを紡ぐ

川越第一中学校

1945年8月6日午前8時15分。あるはずだった人々の日常が一発の原子爆弾により、一瞬にして失われてしまいました。

80年前の広島で被爆した人々は、どのような気持ちだったのでしょうか。家族を失い、取り残された人々は、どのような思いでそれからの日々を過ごしてきたのでしょうか。「戦争を経験した人々の思いを知り、自分たちができることは何かを学びたい。」そう思い、私は今回の事業に参加させていただきました。

8月5日、私達は広島平和記念資料館を訪れました。そこには、目を背けたくないようなたくさんの資料が展示されており、思わず言葉を失ってしまいました。その中で、最も印象に残ったのは、「N家の崩壊」です。被爆者のNさんとその家族の様子を描いた記録写真で、当時の被爆者の方々への理解の無さがよく現れている資料でした。何もしていないのに差別され、後遺症に苦しみ、貧しい生活を強いられる。原爆は、たとえ生き延びたとしても、その後の人生を大きく狂わせてしまうものなのだということを強く実感しました。

8月6日の朝、私たちは広島平和記念式典に参列しました。「平和への誓い」の冒頭で話された、「いつかは訪れる、被爆者のいない世界」という言葉が心に残っています。原爆、そして戦争の恐ろしさを語り継ぐ人がいなくなってしまうたら、当時の人々の苦しみや悲しみは、段々と忘れられてしまいます。それは、絶対にあってはならないことです。2度と同じことを繰り返さないために、今私達にできることはなんだろう、そう深く考えさせられました。

午後には被爆者の方の講演会と、全国から集まった中学生によるグループディスカッションが開かれました。被爆者の方は、「恨むだけでは平和は来ない」と仰っていました。許す、許さないではなく、ただ平和を願う、その切実な思いに感激しました。

また、グループディスカッションでは、「平和な状態」と「平和でない状態」について話し合いました。人によって思い浮かべる「平和」の定義が違うからこそ、相手を尊重して話し合うことが重要だ、という意見が出て、原爆や戦争、そして平和に対する見方を改めるきっかけになりました。世界が平和になるためには、こうしてみんなが戦争や平和について、自分なりに考え、話し合うことが大切なのだと思います。

この事業に参加したからこそ得られた経験をもとに、私達が被爆者の想いを紡ぎ、後世へ平和の尊さを語り継いでいきたいです。

平和な世界

初雁中学校

1945年8月6日の午前8時15分、広島県広島市に原爆が落とされました。ある人は大火傷を負い皮膚が垂れ下がり、ある人は水を求めて川に飛び込み溺れ、ある人は放射線を浴びて病気になり、結果として約14万人が亡くなりました。たった一つの爆弾で。

私は広島平和記念式典中学生派遣事業に参加して、平和の尊さ、大切さについて学びました。

平和記念資料館を見学したとき、被爆直後の広島は、今の広島からは考えられないほど悲惨な状況だったことが分かりました。特に印象に残っているのは、展示されていた被爆者の遺品です。初めて見たとき、私は言葉を失いました。資料館には、亡くなった人の服や遺書がありました。被爆して亡くなった方は痛かったはずですよ。苦しかったはずですよ。しかし、苦しかったのは被爆者だけではありません。大切な人が亡くなってしまう苦しみ。それがどれだけ苦しく、悲しいことだったのでしょうか。原爆は、人々を不幸にしかしないということを改めて感じました。

平和記念式典では、こども代表の言葉、特に「One voice」という言葉が印象に残っています。この言葉の意味は、「一つの声でも学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができる」です。今まで私は「たとえ自分一人だけが平和を願っても世界は平和にならない」と思っていました。しかし、平和を願う人が一人増えるだけでも、世界は平和に近づいていくということに気付くことができました。

私は、今日の事業で学んだことをよりたくさんの人に伝えていきたいと思っています。現在、被爆者の平均年齢は86歳です。いつか、原爆を受けた「被爆者」として後世に伝えられる人がいない世界が訪れます。そこで、私たちができることは、二度と同じ悲劇を繰り返さないよう被爆者の方々の思いを受け継ぎ、語り継いでいくことだと思います。

今に伝える

富士見中学校

世界では第一次世界大戦や第二次世界大戦などの戦争があったことは知っていましたが、そのいずれも戦争の名前や、被害の大きさを感じる数字をなんとなく知っただけで、実際にその被害の様子を見聞きしたことはありませんでした。しかし、今回の広島派遣事業に参加させていただき、現地に行って、資料館でその写真を見て、衝撃を受けました。原爆が投下され焼け野原となった広島
の街、4000 度を超える熱風で全身にやけどを負った人、川の上に連なる大量の人々の絵、どれもその時の悲劇を物語っていました。また、展示物を見ていると、だんだん自分がその場にいるような気がしてきて、言葉に表すのが難しい気もちで胸がいっぱいになりました。また、資料館には亡くなった方の遺品の現物の数々が置いてありました。この遺品の持ち主にはそれぞれ家族がいて、それぞれの人生があることを感じ、そんな多くの人々の命・これまでとこれからの人生を一瞬にして奪ってしまった原子爆弾に対して、恐怖を覚えました。それとともに、国を守る為と言って原爆を今でも所持している国に対して、他国を牽制する方法はそれしかないのかという疑問がわきました。

これらの資料を通して、戦争、争いは人々にとってなにも良いことはなく、これからの世界に深い傷を負わせるということが、改めて理解出来ました。また全国の小、中、高校生と平和についてディベートを行う「全国平和学習の集い」にも参加させていただきました。そこで実際の被爆者である八幡さんのお話を聞きました。八幡さんのお話から、自身が体験した戦争を二度と繰り返してはいけないという信念を感じ、それとともに、その信念をその場にいなかった人だけでなく、より多くの人に伝えていけるようにしなければという使命感がわきました。

今年は終戦 80 年なので自分を含め、多くの方が戦争について再認識したと思います。しかし、今現在、世界では争いが絶えていません。さらに被爆者の平均年齢も 86 歳を超え戦争の記憶が薄れつつあります。「武力で解決させる世界」にならないように、自分が広島で感じた戦争の悲惨さや怖さ、命の重さについて一人でも多くの人に広めていけるようにします。

平和へと

野田中学校

この夏、私は、広島に行って、様々な気づきを得た。

平和資料館では、被爆者の方が描いた絵を見た。端についた黒ずんだ血から、重い悲しみが伝わってきた。他にも、原爆が落ちた時間で止まっている時計や、その日に渡す予定だった誕生日プレゼントを見た。それらを見て、私は、原爆の落ちた日に、亡くなってしまった人、一人ひとりにも、私達となんら変わりのない日常があったことを実感した。その後、館内を回っている中で、特に印象に残ったのが、「N 家の崩壊」という展示だ。原爆を受けて生き延びたことはいいものの、原爆の後遺症で差別されたり、藁にもすがる思いで行った原爆病院から、もう手の施しようがないと突き放されたりしていく中で、家族が崩壊していく。目を背けたくなるような展示だった。展示を見たり、説明を聞いたりしていく中で、記念式典や資料館が、どのような役割を果たしているのかが見えてきた。

原爆ドームや資料館の中には、予想以上に外国人がいた。皆が真剣に学んでいる姿を見て、原爆の恐ろしさを世界中に伝え、広める役割を果たしていることを体感した。第二次世界大戦後に核兵器が使われなかったという事実。大げさかもしれないが原爆ドームや資料館、原爆の恐ろしさを訴え続けてきた被爆者の方々のおかげだと思う。平和記念式典には私達だけでなく、全国から学生の代表団が来ていた。今までこうして、全国からの学生が参加することを通して平和の大切さを学び、それを広めてきたのだろう。

私にとって、平和とは、どうしても、重いテーマになりがちだ。今回、様々な過去の事実と向き合い、平和について考えることも、重く感じた。私達の世代にとって「平和」を語ることが「重い」のはなぜだろう。明るい未来が見えず、暗いことばかりを想像するのは辛く、つい目を背けたくなる。つまりそういうことだろう。だからこそ、過去と正面から向き合い、平和な世の中を実現し、明るい未来について考え、語り合えるようにしたいと今回の体験から感じた。学校の枠を超えて、同じ思いを共有する仲間と交流し、友情を育めたことも明るい未来に向けて、とても素晴らしい体験となった。

「平和」

城南中学校

私は初めて広島県に行き、平和記念式典に参列させていただきました。広島県では初めて体験することが多くあり、とても充実した二泊三日の旅になりました。

私には今回の派遣で特に印象に残ったことが二つあります。

一つ目は広島平和記念資料館を回った時のことです。

資料館には、絵や写真、資料など、様々な物が展示されていました。色々なところでよく見るボロボロになった軍服や、ちぎれて薄汚れた服、焦げた三輪車やお弁当など、実際に見てみると、まがまがしいなにかを感じました。また、十二歳で白血病により亡くなった佐々木禎子さんが折ったとされる折り鶴がショーケースに飾られていました。折り鶴はとても小さく、「生きたい」という強い思いで一生懸命折った禎子さんの千羽鶴は、私の目にくっきり刻まれました。

二つ目は広島平和記念公園を見て回った時のことです。

記念公園には、見たことはあっても意味を知らない建物が多く、常に驚きともに公園内を見学していました。例えば平和の灯です。この灯は一九六四年八月一日以来一度も消えずに燃え続けています。これには理由があります。それは地球上から核兵器がなくなるからです。

この灯には「核兵器廃絶」という強い願いが込められています。しかし、世界の国々の核兵器の保有数は、灯の火がついた一九六四年時点で約三万五千発、二〇二五年一月時点で約一万二千五百発と、数が少なくなっているものの、なくなっているわけではありません。

私は、核兵器を持っているからといって、自国の安全が守られるわけではないと思います。

国同士で対立しそうになったときは、お互い武力ではなく、話し合って解決することが重要だと今回の研修を通して改めて強く感じました。

貴重な経験をさせてくれた広島

芳野中学校

八月五日、未来の平和を願うため広島に向かいました。

何故、この日に出発したのでしょうか。それは、二日目に当たる八月六日が広島にとってとても重要な一日だからです。

一日目は広島への移動と平和記念公園の見学をしました。始めに、資料館に行き戦争と原爆の悲惨さについて学びました。原爆は一瞬で多くの方々の命を奪いました。被害者の一人、佐々木禎子さんは二歳のときに被爆し、小学六年生の秋に白血病を発症しました。原爆は人を殺害するだけでなく、生還した人の人生も狂わせました。彼女は平和を願うために亡くなる直前まで一三〇〇羽以上の折り鶴を折っていたそうです。原爆の悲惨さに驚きました。

二日目は平和記念式典への参列と、広島市役所への訪問をしました。八十年前の一九四五年八月六日八時十五分。広島に原爆が投下されました。平和記念式典では、原爆被害者の追悼、並びに未来へ向けた平和宣言をしていました。式典は朝の八時から始まり、原爆投下時間になると、全員が黙祷をします。そして内閣総理大臣を始めとした広島知事や各国の方々も参列されるととても重要な式典です。テレビで見た方も多いのではないでしょうか。式典では、小学六年生が平和宣言を行っていました。「いつかは訪れる、被爆者のいない世界」という言葉に胸がつまりそうでした。

式典終了後、広島市役所で被爆者の方の体験談を伺いました。体験談を聞いたあとには他の都道府県から来た人たちと交流をしたり、原爆が広島に落ちた時、他の都道府県はどのような様子だったのかを意見交換をしたりしました。私のグループには、広島、東京、岡山、茨城、神奈川の子がいました。広島では、原爆が落ちたときに地下にいたため、無傷で助かった人がいたという話を聞き驚きました。

三日目は川越に向かって出発しました。長いようで短かった三日間の旅で、私達は貴重な体験をしました。

最後に、広島記念公園の石がけには【安らかに眠ってください。過ちは二度と繰り返しませぬから】と書かれていました。私自身、二度とこのようなことが起こらないように呼びかけていきたいです。

平和な世界を目指すために

東中学校

私は戦争がない世界を創っていくのに自分はどうしたらよいのだろうか、この事業に参加させていただきました。

当日、平和記念資料館に着き、館内を歩いていくと現実でないような写真や遺品等が私の目に飛び込んできました。全壊した建物、大火傷に苦しむ赤ちゃん、目が開いたまま亡くなっている写真、体中の皮膚が溶けて歩く人達、家族全員が洋服もなく防空頭巾だけで歩いている絵等でした。言葉だけでは言い表せないほど、私の心に突き刺さりました。

一番私の心に残っているのは、焦げて傷がある砂利の入ったお弁当箱です。そのお弁当箱を見て、その子が「いってきます。」と言い、お母さんが「いってらっしゃい」と見送る原爆が落ちる前の日常の姿が私の頭に浮かびました。

平和記念公園では、原爆に耐えた被爆樹木のアオギリの強さを知りました。アオギリの花言葉は「秘めた意志」です。被爆したが、今後は平和な世界でありたいという植物の命の強い”意志”を感じました。

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式には各国の代表、広島市民、多くの方が参列しました。また、第一回全国平和学習の集いがありました。原爆投下の概要説明と八幡照子さんの被爆体験証言、全国の学生とのグループ・ディスカッションがありました。八幡さんは何十人何百人の被爆者が押し寄せてきて、幽霊の行列のようだったと教えてくれました。そのとき、資料館で見たことを鮮明に思い出しました。グループ・ディスカッションのとき同じ班になった方は、原爆による爆風で人が川まで飛ばされ、川底に衝突し亡くなった人を見たという祖父から聞いた話をしてくれました。その仲間は苦しそうに話しているように見えました。

原爆は多くの命を一瞬で奪う残酷なものです。終戦記念日はあるけれど、戦後八十年の時間をずっと苦しんでいる方々が多くいると思うと、本当に戦争が終わったのかと私は思います。

私は今回の事業に参加して、戦争がない世界を創っていきたくて強く思っています。ただ、平和を伝えていく難しさを感じます。なぜかという、自分が体験していないことを自分のこととして伝えるのが難しい、どうしたら伝えていけるのでしょうか。これから東中学校の仲間と考えていきたいです。

今、私が考える平和とは、仲間同士、お互いに認め合い受け入れ理解していくことです。また、ご飯を食べることができて、寝ることができて、家族や仲間と

暮らしていけることも平和の一つと考えます。

平和な世界を目指すためにこれから、もっと多くのことを知る必要があると感じています。歴史を学び事実を知ること、グループ・ディスカッションのように仲間と対話をする事、そして、広島市長さんがおっしゃっていた、「平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいても、まず話をしてみるのが大事であり、決して諦めない。」ということです。

私たちが今できることはまさに、広島市長さんが言っていたことだと思います。自分の意見と相手が反対の意見でも、その意見を理解し、受け入れることは世界が平和につながると思います。

今回の派遣事業では、平和とはなにか、平和な世界を創るために私たちに何ができるのかを考えることができました。

日本に生まれた私の使命

南古谷中学校

わたしは、3日間の派遣事業に参加して、原爆が落とされた 80 年前のあの日を改めて痛感しました。

今回の事業では、1 日目に平和資料館の見学と、平和記念公園の散策。2 日目に広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式典へ参列や、全国の平和派遣生として集まった学生とディスカッションをしました。今回の派遣事業を通し、とくに印象に残ったことが2つあります。

1 つ目は原爆の恐ろしさです。爆心地から半径2キロ以内の建物は全壊・全焼の被害を受けたことは知っていましたが、半径5キロまでも半壊・半焼、または大破するなどの大きな爪痕を残していたことを知りました。それ以外にも爆風、熱線、放射線が3秒というほぼ一瞬で建物を壊し、人体を吹き飛ばし、最悪即死にまで至った人がいることが初めてわかりました。特に熱線はその3秒間で、人の体を瞬時に焼きました。皮膚もただれ、骨が見えるほど深い怪我を負い、目玉が飛び出る人もいたそうです。「苦しい。痛い」ともがき、地を這いつくばる人々。その様子を私は資料館で目の当たりにし、体の震えが一向に収まりませんでした。その地獄絵図がたった一つの爆弾でつくられてしまうこと、私は当時の光景を絶対に忘れられません。

2 つ目に平和記念式典で掲げられた、「平和への誓い」です。この誓いは、原爆死没者の霊を慰め、世界恒久平和の実現を祈念するために、行う誓いです。私はこの誓いを聞いている中で「One voice」というフレーズが心に残っています。日本語訳で「一声」。誓いの続きには「たとえ一つの声でも、学んだ事実を思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです」と綴られていました。もし、戦争に対する意見を求められた時、言葉にするのが難しいと感じる人は少なくないと思います。ですが難しいと感じても、ただ単純に「戦争は怖い」「原爆を落とさないでほしい」そんな一言でもいいと思います。簡単な一言でも、戦争という概念に変化が起こるはずです。戦争はだめなんだ。そう思ってくれる人がこれから増えていけば、世界中の人と平和を創り上げていけるのではないのでしょうか。

今でも世界の何処かでは、戦争が起きています。その現状から目をそらさず、ひとつの尊い命と向き合い続けること。そして、戦争が終わるように平和を叫び続けるのではなく、戦争がない世界が永遠に続いていけるように、平和を叫び続けること、それが、世界唯一の被爆国に住む私達の使命ではないのでしょうか。

今に伝える想い

高階中学校

私が、平和に対してできることはなんだろうか。

私の曾祖母は、広島出身で爆心地の近くに住んでいました。幼い頃から8月6日を他人事に思えず、毎年テレビを通して広島平和記念式典に目を向けていました。

私は、8月5日～7日、広島で言葉にならない複雑な思いを抱き、学ぶことができました。初日8月5日は、平和記念式典前日ということもあり、たくさんの警備や団体がいて重々しい雰囲気でした。平和記念資料館では、原爆の残酷さを伝えるたくさんの展示物や遺品から原爆の恐ろしさや凄まじさを肌で感じることができました。また、原爆投下後、何十年にも渡り原爆症で苦しむ人々の写真や映像は、胸が締め付けられるものがありました。8月6日の平和記念式典では、原爆死没者名簿奉納で、今年は4,940の名前が追記されたことから、今も原爆の傷跡が続いていることに衝撃を受けました。式典後、原爆を体験した方から話を聞く機会があり、本やインターネットで見る情報よりも当時の悲劇が目の前に迫るような感じを受け、改めて原爆の悲惨さを感じ取ることができました。

広島県の湯崎知事は「核抑制」ではなく「核兵器廃絶」への歩みを決して止めることのないことを平和へのメッセージとしていました。

私は、平和を祈るだけでなく、行動することが大切だと思います。戦争を体験した人たちは80歳を超える高齢となり、体験談が語られにくくなっています。そんな時こそ、戦争の悲惨さを忘れてはいけないと思います。そして、人から人へ生きる声を後の世代に伝えていく時だと思うのです。

今、私にできることは何か。今回、平和記念式典に出席して明確になりました。それは、県を越えて戦争や原爆がもつ悲惨さを伝えていくことです。自分が感じ、学んだことを精一杯伝えること。そして、その言葉一つ一つがこの先に続く平和につながると信じて行動に移したいと強く想いました。

広島で感じた平和

高階西中学校

1945年8月6日午前8時15分人類史上初めて原子爆弾が広島に投下されました。実際には原爆は地上400mで落下しました。ですが、すべてをふきとばす爆風、4000℃近くの熱線、そして原爆が落ちた後も長い間被爆者の人たちを苦しめた放射線で約35万人が亡くなったそうです。

広島では、平和記念資料館で平和に関する資料や原爆が落ちた当時の写真、絵画、映像や、被爆した人が着ていた制服などを見ました。それらを見て想像していたよりも大きな被害があったことがわかりました。そのあとはボランティア活動をしている人と一緒に平和記念公園を回りました。公園の中には外国人の墓や慰霊碑がたくさんあり、中には今でも遺族から引き取られていない遺骨がしまっている場所もありました。ボロボロの原爆ドームをみて、もともとは頑丈だった建物が原爆によってここまで破壊されてしまうのだと思いました。

二日目は平和記念式典に参列しました。8時15分の原爆が落ちた時間、黙とうしている間の平和の鐘はとても心に響きました。平和への誓いで小学生の二人の言葉が自分も平和を意識しないといけないと感じさせました。その後は全国平和学習の集いに参加しました。いろいろな地域から来た人と戦時中にその土地であったことを確認したり平和とは何なのかを話し合い平和の大切さを感じることができました。被爆者の方の話も聞き、原爆の恐ろしさを言葉で鮮明に話してもらいました。その方の「武力だけで解決せずに、対話を重ねて相手を理解することで解決してほしい」という言葉が一番印象深く、とても共感しました。

僕はこの三日間で八十年前に広島に落とされた原爆による被害がとても大きかったことがわかりました。これらの体験や経験を踏まえ、これからの平和な未来を創っていくのは自分たちだということや、一人一人の意見や考え方によって平和を保つことができると思いました。このことから、ぼくはみんなでこの平和な状況や未来について考えていく必要があるのではないかと思います。

平和への願い

寺尾中学校

八月五日と六日の二日間、命の大切さや平和について改めて考えるために広島県広島市へ行ってきました。広島はとてもきれいな街で、高いビルや道路を走る路面電車などがあり、八十年前に原子爆弾が落とされたとは思えないほどでした。

一日目に訪れた平和記念資料館では、まるで地獄のような光景を目にしました。目が飛び出してしまった絵、全身にやけどを負った人、穴の開いたボロボロの服、焼けてしまった自転車やお弁当箱、八時十五分のまま止まってしまっていた時計。それらを見てとても辛く悲しい気持ちでいっぱいになりました。特に池の水を飲もうとしてそのまま亡くなってしまった人の絵は今でも心に残っています。飾られている絵や写真を見て思ったことは、原爆は一瞬で人の当たり前生活や幸せを奪ってしまうものだということです。

二日目は平和祈念式典に参加しました。その時に学んだことは「願うだけでは平和は訪れない、実行するもの」ということです。スピーチを聞いて平和の大切さや命の尊さを改めて感じることができました。

この二日間を通して原子爆弾の悲惨さ、命の大切さを強く感じました。戦争を経験していない私たちが、被爆者の思いを忘れないためにも今回学んだことを周りのひとに伝えていきたいです。

世界中が平和になり、核兵器がなくなって「平和の灯」が消える日がきて、戦争のない世界になることを心から願っています。

平和を繋いで

砂中学校

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、一発の原子爆弾が広島に投下されました。その一発によって建物のほとんどは倒壊し、骨すら残らず亡くなった人々や眼球や皮膚が落ちながら水を求めて亡くなった人々など、その情景は平和とはほど遠い状況だったでしょう。

今年は、そのような悲慘な出来事が起こってから 80 年の節目です。そのような年に私は、広島平和式典に参加することができました。平和式典に参加し、私が知ったことは主に 2 つあります。

1 つ目は、原子爆弾による被害は多くの人の体や心に刻まれ、今もなおその被害を受けている人も多いということです。被爆から 80 年たった現在でも、原爆による白血病などの症状で苦しんでいる人もいます。また、原爆により両親などの親族をなくした方、ほかにも様々な要因で原爆による被害を受けている人々が平和式典には参加していました。また、平和資料館では原爆による直接的な被害だけではなく、白血病やケロイドなど、様々な後遺症について学ぶことができました。

2 つ目は、被爆から 80 年たち、被爆者も少なくなっている現在でも、多くの人々が原爆による被害を知り、平和を紡ぎ、それを未来へ繋いでいこうとしているということです。式典には、原爆による被害を受けていない方々も多く参加していました。そして、世界中から平和や原爆について知り、その上で広島の、日本の、そして世界の平和を祈りに来ている人々で平和式典はあふれかえっていました。それは、良くも悪くも原爆が世界に与えた影響でしょう。

ですが、その影響や被害を知り、平和を祈るだけでは現状は何も変わりません。次の世代を担い未来を創っていく私たちが、原爆や戦争による被害などを周りに伝え、学んだ知識や自身の考えなどを生かして平和を紡ぎ、それを絶やさないように未来へ繋げていくことが重要であると、私はこの派遣事業を通して考えました。みなさんも、平和について考えてみてはいかがでしょうか？

世界を平和で満たすために

福原中学校

みなさんは、今から八十年前に、ヒロシマでどのようなことが起こったのか、知っていますか？私は各学校の代表二十一名と川越市の代表としてヒロシマの地へ行きました。そこで、平和や原爆、戦争について三日間を通して学んできました。

まず、平和記念資料館を訪問しました。そこでヒロシマの人々は原爆により、今まで自分が想像していたよりかはるかに大きな苦しみがあったことに気づき、言葉が出ませんでした。怪我をして全身血まみれになってしまった人や、水を求めて、空から降ってくる放射性物質を含む黒い雨を飲もうとする人々など、非常に多くの人々がもがき苦しんでいました。

その中には、小さな子供もいれば、未来に希望あふれる若者もいました。「この中に、もしも自分の身近な人がいたら...」と考えると、胸が強くしめつけられました。

そして、次の日には平和記念式典に参列をしました。平和記念式典では、日本の方だけでなく、海外の方もとても多く参列していて、海外の人々も日本の人々も、国境を超えて手を取り合い、平和の実現に向けて行動する必要があることを、改めて実感しました。

また、原爆投下時刻の八時十五分に合わせ、黙祷を捧げました。皆が思いを一つにし、二度と悲劇を繰り返さないと誓いながら、犠牲者の方々が安らかに眠れるように、平和への思いを祈りました。

現地の小学生が発表した平和への誓いの中で、「たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはず」という言葉がありました。皆が思いを一つにし、世界で共に行動していけば、この世から戦争をなくすことができると思います。

今も、世界では戦争が行われ、数多くの核兵器が今すぐにでも使用できる状態にあります。原爆や戦争は、直接被害を受けた方だけでなく、その周りの方々の幸福な人生にも、非常に大きな影響を与えます。もう、二度とヒロシマで起こった悲劇を繰り返してはいけません。

これからの生活では、周りの人に今回学んだことを広めていき、一人ひとりの声を重ね合わせ、地球を平和で満たしていければと思います。

同じ過ちを繰り返さないために

大東中学校

みなさんは今までどんな出会いがありましたか。今日出会った人はあなたと同じ時代を生きた人です。時代を創った仲間とも言えるでしょう。しかし、八十年前惨憺たる時代を生き抜いた人々がいました。言葉を制限され、生きる道をも制限され同じ時代をともに生きていくはずだった人々の命を奪い合う時代がありました。「そんな時代をもっと深く知らなければならない。でなければ、同じ過ちを繰り返してしまう。」と私は思いました。

この夏、私はあの「ヒロシマ」を知る旅に出かけました。

2025 年8月。広島では平和を未来に繋いでいく取り組みが数多く実施されていました。その中でも一番印象に残ったのは被爆者八幡照子さんのお話です。当時八歳で被爆したという照子さんの声は優しくも芯のある声色でした。照子さんが語った家族の愛や訓練の様子などは、とても心がえぐられる気持ちがありました。その中で一番私の中で心に刺さった話があります。それは、平和について学びたいと思っている子どもたちのために記憶を伝えているということです。私は、この言葉に人生をかけた決意を感じました。痛みに耐え戦争の悲惨さを私達に伝えていく決意です。この決意に私はとても感動しました。今のこの自然豊かな広島を創り前を向き続けた先人の勇気に目頭が熱くなりました。そのバトンを受け取った私たちが、政治、戦争に無関心で良いわけがない。そう痛感しました。

この時代に生きる私達に今後戦争の経験は必要ありません。しかし、一人ひとりが深く歴史を知り得なければ過ちは簡単に繰り返してしまうでしょう。私が今回歴史を振り返って得たものは「命の尊さ」です。広島は、人がいる限り、命がある限り、人はまた歩き出せるということを教えてくれた場所です。

広島で、知り得たヒロシマの歴史を少しでも多くの人に伝えていくこと。一人でも多くの人に関心を持ってもらうこと。それが、今私達「平和を愛する人々」ができる第一歩なのではないでしょうか。

繋いでゆく

大東西中学校

私は 広島平和記念式典中学生派遣事業に参加し、二泊三日で広島を訪れました。今回の派遣を通して、教科書や映像では伝わりきらない原子爆弾の悲惨さや、平和の大切さを自分の目と心で実感することができました。

一日目に訪れた広島平和記念資料館では、原子爆弾が投下された瞬間に何が起こったのかを示す展示や、被爆した方々の遺品を目の前にしました。特に印象に残ったのは、当時のまま残された衣服や焼け焦げた生活用品です。それらには、普通の日常を生きていた人々の時間が、突然奪われたという重みが刻まれており、私は言葉を失いました。また、爆心地から近い場所に立っていた原爆ドームを見たとき、建物の形が今も残っていることが奇跡のように思える一方で、その存在自体が原子爆弾の威力と恐ろしさを後世に伝える証人であると感じました。

二日目には、広島平和記念式典に参列し、黙祷を捧げました。会場全体が静まり返ったとき、言葉にできない厳粛さを覚えました。その後に伺った全国平和学習の集いで、被爆体験証言では、八幡照子さんのお話を聞きました。直接当時の体験を語る声には強い迫力があり、資料や映像だけでは知ることのできない「人間の感情」や「生きることへの思い」が伝わってきました。私は、どんなに残酷で悲しい現実も、語り続けることによって初めて後世に伝わるのだと実感しました。同時に、今を生きる私たちがその思いをしっかりと受け止め、さらに次の世代へとつないでいかなければならない責任があると強く感じました。また、他県の中学生との、グループ・ディスカッションを行った際には、「平和は当たり前ではなく、努力して守り続けるものだ」という考えを共有でき、学びを深めることができました。

今回の派遣を通じて、私が最も強く感じたのは「知った者の責任」です。広島で実際に見聞きした事実を、私たちの世代が次に伝えていかなければ、あの日の出来事は風化してしまいます。戦争を知らない私たちだからこそ、学び続け、平和を願い続けることが求められているのだと思いました。

今後は、広島で得た体験を周りの人に伝えたり、日常の中で平和について考えたりすることを忘れずに過ごしていきたいです。そして、広島の地で学んだ「命の尊さ」と「平和の尊さ」を、これからの自分の生き方に生かしていきたいと強く感じました。

広島平和式典派遣事業に参加して

霞ヶ関中学校

私はこの広島での三日間で戦争や平和について学び、考えることができました。平和記念式典に参列したり、被爆体験講話を実際に聞いたり貴重な体験ができました。その中でも特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は平和記念資料館の見学です。資料館には酷い傷を負った人や当時の街の様子が絵や写真で展示されていたり、遺品や遺書なども多く展示されていたりしました。その中に原爆が投下された八時十五分で止まった時計がありました。きっと今と同じように「いってきます」「いってらっしゃい」と何気ない会話が交わされていたことでしょう。しかし、待っても待っても家を出たきり帰ってこない。そして二度と会うことができなくなった。そんな経験をした人がたくさんいると思うと胸が痛みます。その出来事を知ったからこそ私は当たり前で日常が送れることのありがたみに気づくことができました。

二つ目は全国平和学習の集いでの被爆体験講話です。広島に原爆が投下されて八十年がたった今、実際に被爆された方の人数は十万人を下回り、その平均年齢は八十六歳を超えました。そんな中でお話を聞いたことはとても貴重な経験です。講話をしてくださった八幡さんは八歳のときに爆心地から二・五キロ離れた家の裏庭で被爆されたそうです。その日、八幡さんは隣に行くために裏庭へ下りたときです。突然窓が青白く光り意識を失ったそうです。母の声に気づいた八幡さんは裏庭から六メートルほど吹き飛ばされていました。

「みんなで死のう！みんな一緒よ」

大きな布団を家族みんなで被り肩を寄せ合ったときの家族の温もり、絆を忘れることはできない。と八幡さんはおっしゃっていました。八幡さんのお話の中で印象に残っているお話があります。それは、学校の運動場で荼毘に付された遺体は約二千人と記録されていて、その犠牲者の中でも多かったのが建物疎開作業中の中学生だった。というお話でした。どんなに苦しかったことか。どんなに生きたかったことか。犠牲になった人たちが必死に生きたいと願っていた未来を生きている私たちは戦争や平和について知り、向き合っていくことが必要ではないでしょうか。

私は広島で学んだ命の尊さ、平和の素晴らしさ、毎日を過ごすことができることへの感謝を忘れずに、世界中の人が笑顔で平和に暮らせる未来を創っていきたいです。

ヒロシマの記憶を語り継ぐために

霞ヶ関東中学校

今からちょうど 80 年前の 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分。広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして人々の人生が奪われました。そのことを知って、私は、平和を維持していくためには自分がどうすればよいかを考えるきっかけにするため、この事業に参加しました。

広島に着いて、はじめに広島平和記念資料館を訪れました。資料館には被爆された方の遺品や被爆当時の写真・絵などが展示されていました。なかでも原爆が落とされた広島は全てが黒く焼き尽くされ、町が一瞬でなくなったことを写していました。言葉では言い表せないほどの惨状で、今の広島からは想像できないものでした。

1 つの原子爆弾がこれほどまでに多くの人々の未来を奪ってしまったのかと思うと胸が痛く、いたたまれない気持ちでいっぱいでした。

その後、平和記念公園を見学しました。原爆で亡くなった人々のお墓や慰霊碑、原爆ドームは原爆の被害の大きさを物語っていました。また、「原爆の子の像」が作られたきっかけである佐々木禎子さんの話をガイドさんから伺い、平和の象徴である折り鶴には、たくさんの祈りが込められていると感じました。

翌日の 8 月 6 日は広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式に参加しました。会場には日本人だけでなく外国からも多くの方が参列していました。式典が始まり、8 時 15 分の黙祷は、被爆国である日本だけでなく世界中の国にとって平和を祈る大事な 1 分間だと感じました。

今回、広島派遣事業に参加して、戦争は何があってもしてはならないということ、また、平和とは世界中の人々が幸せであることで、一人一人が周りの人のために、ほんの少し行動することができれば世界の平和につながるということを学びました。そして、平和を維持していくために今の私ができることは、80 年間受け継がれてきた戦争の記憶を、これからも私たちが語り継いでいくことだと感じました。現在被爆者の年齢は 80 歳を超えていて、実際に話を聞ける機会が少なくなっています。だからこそ、学んだ私たちがまわりの人に伝えていくことが、未来の平和を守る第一歩になると思います。この世界から核兵器がなくなるまで、「ヒロシマの記憶」を次世代に伝えていくことは、唯一被爆を経験している日本に住む私たちの使命だと思います。これからも私はまわりの人や次世代に「ヒロシマの記憶」を語り伝えていきます。

戦後 80 年、今私たちにできること

霞ヶ関西中学校

昭和 20 年（1945 年）8 月 6 日午前 8 時 15 分、人類史上初めて、原子爆弾が広島に投下されました。地上 600m で炸裂し、たくさんの命を一瞬にして奪いました。街を焼き尽くし、たくさんの命を奪いました。

私は、人生で初めて被爆地である広島を訪れました。道路を歩いているだけでも、この地で地獄のような苦しさを感じた人、亡くなってしまった人がいるということを考えると、足が重くなりました。資料館に入ると、空気が一変しました。静けさが漂い、暗い雰囲気でした。そして、私は言葉を失いました。全身に火傷を負った人、目玉が飛び出してしまった人、燃えてしまった街から逃れようと川に飛び込む人。想像を絶する現実でした。心が痛み、酷く締め付けられました。その他にも、ボロボロになってしまった洋服、前輪やペダルのない自転車、死亡診断書や遺書など、当時の恐ろしい生活を映し出しているものがたくさんありました。その中でも、私の心に一番響いたのは言葉でした。「行ってくるよ。と言って別れたのが最後でした。」「お父さん、苦しいよ…。」これを見て、当時の人達がどれだけ苦しかったか、私には計り知れませんでした。資料館を出ると、美しく輝いている太陽、鳴いているたくさんのセミ、餌を探すハトなど、いつも通りの日常でした。身近でたくさんの生命が活動していることに、大きな喜びを感じました。これこそが平和そのものだと思います。翌日の式典では、世界中の人々が集まり、平和への祈りを捧げました。

戦後から 80 年という節目を迎えた今でも、世界では戦争が続いています。中には、核兵器を持ち敵国を脅す国もあります。こんな状況の中、私達には何ができるのでしょうか。私は、今回学んだことを 1 人でも多くの人に伝えていきたいです。

家族

川越西中学校

皆さんは家族が好きですか。僕は今回の広島平和記念式典中学生派遣事業を通して、家族がいる日常がどれだけ嬉しいことなのかが分かりました。

僕は平和について学ぶため、広島市に行きました。初日の平和記念資料館では、そこには原爆を受けた人の遺品などが展示されていました。一つ一つ見ていくと爆風によって折れ曲がってしまった物や、熱によって溶けてしまった物など色々な物がありました。原爆の資料を見て、人も物も心も壊れてしまう怖いものだと思います、二度と原爆を落としてはいけないと強く思いました。

二日目は平和学習受入プログラムに参加しました。僕はまず、八幡照子さんの話を聞きました。八幡さんは爆心地から約2.5キロ離れた自宅で8才の頃に被爆しました。八幡さんの話を聞いていると「あたりまえ」がどれほどうれしいことなのかが分かりました。その後のグループディスカッションでは、二つのテーマに分けて話し合いました。一つ目のテーマは「あなたの地元では、第二次世界大戦中にどのような被害を受けましたか。」というものです。川越市では二個の爆弾が落とされ、爆風で一人亡くなりました。ほかには機銃掃射を受けて旅行者が亡くなったのと、B29が高階村に落ちて搭乗員が捕虜になりました。市外だと空襲で百万人くらいが被害を受けたり、空襲によって火災が起きて町が平らになってしまったりしたようです。二つ目のテーマは「今、平和でない状態とはどのようなことがありますか。また、それはどうしたら解決できると思いますか。」です。僕は治安が悪いと思いました。ニュースなどでは車が盗まれたり、家に不法侵入されたりしています。そのようなことを防止するためには防犯をしっかりとすると良いと思います。

僕は今回の学習を通して、平和の尊さ、あたりまえの嬉しさを知りました。そしてこれからも家族や友達をこれからも大切にしたいです。

広島平和記念式典に参加して

名細中学校

僕は今回広島平和記念式典に参加して学んだことがたくさんあります。

一日目は資料館を見に行きました。入った瞬間から、悲惨な光景の写真が貼ってあり言葉が出ませんでした。そう思いながら進んで行くに連れ、服や写真や絵などがありました。それを見たときこんなボロボロになるほどの爆風を受け、どんなに苦しんだのかが想像できて、僕も胸が苦しくなりました。可哀想とは言い切れないほど悲しい気持ちになりました。平和公園を周って最初に思ったのですが、こんなに広い場所が一瞬にして原爆により焼け野原になったと考えたら、どんなに原爆が恐ろしいかが理解できました。やはり原爆は無くなった方が良かったと思いました。原爆ドームはとても壊れていたものの、色んな人の協力で支えられていて、こういう行動が世界に広まってほしいと思いました。僕も見習いたいです。

二日目は、式典に参加しました。総理や海外の大使達なども来ていたので、それほど大事な式典なのだと改めて感じました。式典で一番印象に残ったのは平和の誓いです。平和の誓いを聞いて、平和になってほしいという強い思いがこっちまで伝わって感動しました。午後に被爆者の話を聞いたときにまったく知らない話をされていて、特攻隊や原爆の範囲などが知れて、とても良かったです。その後他の市の人たちと話し合いをし、今でも平和ではないところがたくさんあって、悲しく感じました。被爆者の人たちの思いがよく理解できました。戦争が早くなくなってほしいです。

僕はこの行事を通して様々なことを学ぶことができました。今回で経験したことを色んな人に伝えて、戦争のことをもっと知ってほしいです。そして、平和になるようにみんなと協力したり、親切に接したりと小さなことでも取り組んでいけるように頑張りたいです。

「Piece と Peace～私たちが創る未来～」

鯨井中学校

「平和ってなんだろう」。戦争について教科書や動画サイトなどで多くの情報を知ることができますが、私にはどこか遠くで自分には関係ない世界に感じていました。そんな中、実際に広島に行き、原爆資料館での空気感や式典での人々の思いを心で感じ、平和とは何なのか考えたいと思い、この事業に参加しました。

広島に着いてみると、国内外問わず多くの人がキャリーケースを持って集まっており、広島が平和の発信地として国境を越えて世界から注目されていることを実感しました。たくさんの学習をした中でも私が特に印象的だったのは、8月6日の午後に行われた「全国平和学習の集い」で被爆者である八幡照子さんのお話を聞いたことです。戦時中、楽しみにしていた遠足もお弁当が芋と豆だけになったこと、授業で竹槍の先で人を殺すことを教わり戦争一色の学校生活だったこと、原爆が投下され6メートル吹き飛ばされ、第二第三の爆弾に備え死を覚悟しながら大きな掛布団を広げて肩を寄せ合ったときの家族のぬくもり、放射線被害を知らず汚染されたものを使って生活したこと、お腹を空かせお菓子だと思い駆け寄った袋には名前も分からぬ遺体の焼かれた骨が入っていたこと。その全てが画面越しでも文字でもなく、今日の前で話してくださっている八幡さんの80年前から今日までずっと変わらない記憶として私の心にも響きました。八幡さんの語り口からは、「一人でも多くの子に、少しでも多くの当時の状況を伝え、記憶として残したい」という願いが感じられ、私もこの気持ちに応え、当時の記憶を未来につなぐ世代としての役目を果たしたいと思いました。

広島への派遣を経て、私なりの「平和って何だろう」の答えを探ことができました。それは、「自分たちの手で、過去の過ちを繰り返さずに平和を築けた時」です。今回のように被爆体験を聞いたりして戦争を知ることが、戦争を経験した代からパズルの“Piece”を渡されたようなものです。Pieceを誰とどうやって、どのようにいつ組み立てるかは全て未来を生きていく私たち次第です。Pieceは図書館や教科書、さらに今では世界中の情報を知ることができるインターネットなど、多くの場所に転がっていると思います。実際に経験したことが無くても、「知る」ことで Piece は手に入れることができます。そして、知った知識を心の中に留めておくだけでなく、発信し、行動に移すことで、私たちは自分たちの手で Piece をつなぎ、武力ではない方法で平和“Peace”を築いていくことが出来ると信じています。

本当の平和とは何か？

山田中学校

今回、私は戦争や平和の尊さについて学び、それを他の人に伝えたいという思いがあったため、この派遣事業に参加しました。

一日目は、平和記念資料館や平和記念公園を訪れました。公園内は被爆者のボランティアさんに案内していただきました。私は、展示されている遺品などを初めて間近で見たので、自分が想像していた何倍も悲惨な状況だったと知り、心が痛みました。

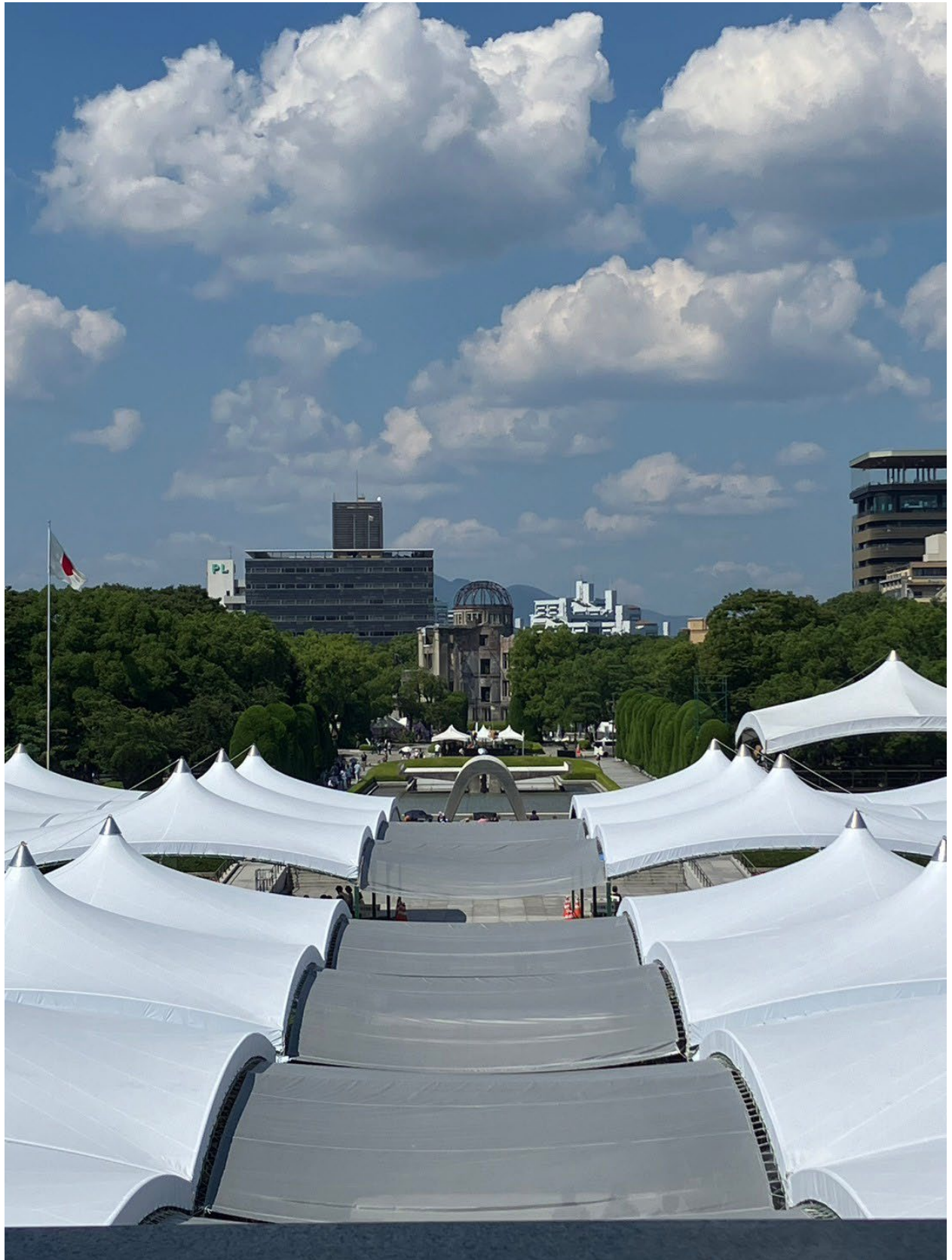
二日目は、平和記念式典に参列しました。朝から日差しが照りつけてきてとても暑かったのですが、八十年前の被爆者の方々は比べものにならないほど熱い思いをしたのだらうと考えると、暑いと感じてしまった自分が申し訳なくなりました。

八時十五分。平和の鐘が何回も、何回も、「カーン」と鳴り、耳に残りました。私は黙とうをしながら、原爆が投下された広島を想像しました。自分の頭の中で叫び声と泣き声が響き、一面が焼け野原になっている光景を思い浮かべました。この黙とうをささげた一分間で、やはり戦争や紛争といった、同じ過ちを犯してはならないと改めて強く思いました。

その日の午後には、平和学習受入プログラムに参加しました。被爆者の方からお話を聞き、現地の中高生と共に平和について考えました。特に印象に残ったのは、被爆者の方の言葉で、「世界中の人々が幸せになったとき、」本当の幸せ“がある”というものです。この言葉を聞いた瞬間、「幸せを感じることが平和なのだ」と確信しました。人それぞれ幸せだと思うタイミングは違いますが、幸せを感じる時間が長ければ長いほど、平和な世界は続いていくのだと考えさせられました。

二泊三日の派遣が終わり、これから人に伝える機会が増えていくと思います。少しでも戦争や平和について多くの人に知ってもらい、さらに広めていくきっかけになれるように、被爆者の方々などの気持ちや思いを引き継いでいきます。









川越市マスコットキャラクター

ときも

令和7年度 広島平和記念式典中学生派遣事業

報 告 書

令和7年11月

川越市 総務部 総務課 総務担当

〒350-8601 川越市元町 1-3-1

Tel.049-224-5550(直通)